

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

► 翻譯上の〈コ・ソ〉と〈這・那〉について

doi:10.29714/TKJJ.199903.0013

淡江日本論叢, (8), 1999

作者/Author：張瓊玲

頁數/Page：230-244

出版日期/Publication Date：1999/03

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.199903.0013>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



airiti

翻訳上の〈コ・ソ〉と〈這・那〉について

淡江大学講師

張瓊玲

一、はじめに

翻訳とは異なる言語間の置き換えである。日本が中国と交渉をするときから、翻訳という言語行動が行われた。異文化を異言語の学習修得によって、自国のことばに置きかえるということはさほど簡単でないと思う。より正しい、よりよい翻訳をするために、相手の言語をよく知らなければならない。換言すれば、相手の言語の構造を根元からよく理解し、相手の言語に精通する必要がある。

筆者は有吉佐和子氏の「地唄」（注1）という作品を翻訳したが、その際、日中両国語における文の構造、表現構造などの相同点と相異点が多く見つかった。その中、特に、指示詞〈ソ〉系が〈那〉系に限らず多くは〈這〉系にも訳されことに気づいた。日本語の〈コ〉系・〈ソ〉系をそれぞれすべて中国語の〈這〉系・〈那〉系に訳してしまうのは果たして適当であろうか。筆者はここにその疑問を提出して、考察してみたいと思う。

二、指示詞の体系

多くの言語の指示詞は二通りの区別しか持たないのに対し（例えば英語では this ↔ that と here ↔ there など）、日本語の指示詞は、コ、ソ、ア 三通りの区別を有する。また、それが整然とした体系を持つことも日本語指示詞の特徴の一つであると思われる。佐久間鼎氏は、早くからこの整然とした体系を「コソアド体系」と呼んでいる（注2）。一方、中国語の指示詞は、一般に、〈這・那〉の二通りの区別をする。しかし、すべての中国語がそうとは限らず、三通り又は四通りの区別を持つ方言もある（注3）。

この稿では、現代日本語〈コ・ソ・ア〉と中国語〈這・那〉との指示詞を中心として、比較・対照をしてみたいと思う。両国語間のずれを検討することによって、二つ言語の性格の違いにまで触れたいと考える。中国語と日本語との間によりよい翻訳ができれば、幸いである。紙幅のため、不定指示詞の体系〈ド〉系と〈那〉系を考察の対象から除いた。

日本語の指示詞体系は、〈コ、ソ、ア〉三系であるのに対し、中国語では、〈這・那

>の二つしかない。両体系を対照してみると、次のようである。

(指示内容)

名詞的									
物：	これ	=	這	それ	=	這	あれ	=	那
所：	ここ	=	這裡	そこ	=	那裡	あそこ	=	那裡
方角：	こちら	=	這邊	そちら	=	那邊	あちら	=	那邊
	こっち	=	這邊	そっち	=	那邊	あっち	=	那邊
連体詞的									
關係：	この	=	這個	その	=	那個	あの	=	那個
情態：	こんな	=	這樣的	そんな	=	那樣的	あんな	=	那樣的
副詞的									
情態：	こう	=	這樣地	そう	=	那樣地	ああ	=	那樣地
	こんなに	=	這樣地	そんなに	=	那樣地	あんなに	=	那樣地

注：表示する方法は、時枝誠記『日本文法 口語篇』による。

上の表によって、日本語の<コ>系は、中国語の<這>系に訳されるが、<ソ・ア>両系は<那>系にしか訳されない。それゆえ、中国人の日本語学習者にとって<ソ、ア>両系の使い分けは困難であり、間違いがしばしば見られる。しかし、両国語の指示詞の対照において、<ソ>系と<ア>系の使い分けも一層興味深いのは<コ・ソ>系と<這・那>系の対応及びずれである。

三、<コ・ソ・ア>の中国語訳の実態とその分析

「地唄」における指示詞を検討してみよう。実際の用例とその訳文をすべて取り出して、<コ>系と<ソ>系に分けて考察する。まず、<コ>系に属する用例は6例あり、すべて<這>系に訳することができた。例文を示すと、

- (1)、小型のスーツケースが二つ。旅立ちに、身の廻りの手荷物は夫婦でこればかりである。(小型的箱子兩個、出發時、夫婦兩人隨身帶的手提行李只有這些。)

他の用例についても、すべて<コ>系は<這>系に訳することができるようである。次に<ソ>系とその訳文を見ると、意外なことに次の三つのグループに分けられる。

- (A) <ソ>系が<那>系に訳されるもの。
 (B) <ソ>系が<這>系或いは<那>系に訳されるもの（注：よく考慮すればするほど、<那>系よりも<這>系に訳される方が自然）。

(C) <ソ>系が<這>系のみに訳されるもの。

それぞれの例文を挙げる。

<p>(2) 「緑よ。ほら、この音」… 「緑か。ふん、そやな、お前に似合うやろ」。 <u>その時</u>の会話を邦枝は懐かしく思い出していた。</p> <p>邦枝懷念地回想起<u>那時</u>的對話。</p> <p>(3) 今朝来た女子大生は、明日また来るだろうか。意味もなく <u>そなん</u>ことを考えたりした。</p> <p>今天早上来的那個女大学生、明天会再来嗎？毫無意義地突然想起<u>那件事</u>。</p>	A
<p>(4) 来月アメリカへ発つのだということも、多分父は知らない のではなからうか。<u>それも</u>よし、知らせずにすめば、いっ そ黙って行ってまおう。 ……。</p> <p><u>這樣</u>（又は<u>那樣</u>）也好、……</p> <p>(5) ピアノは譜の通りに弾けば、一応の音が出して音楽らしく なりますのに、三味線は譜ではてんで曲になりません。<u>そ れが</u>私には魅力なんです。</p> <p>鋼琴只要照著譜彈、能彈出大致的音而像音樂。可是三味線 光照譜是根本不能成曲。<u>這</u>（又は<u>那</u>）是對我有魅力的地方。</p> <p>(6) 「お体に触るといけませんから、一寸お待ち下さいますか。 係りの人に特別に頼んでみましょう」。 「いや、<u>それは</u>不可ん。」</p> <p>「身体被<u>撞</u>到了不行啊！請等一下、我去向辦事員特別拜託看 看」 「不要、<u>這樣</u>（又は<u>那樣</u>）不行！」</p>	B

- (7) 芸術院会員であり、最近は無形文化財の榮譽を受けた菊沢寿久翁は、大家の中でも大立物だから、無論今日のプログラムでは喜利に近く出演する予定で、従って日の高いうちに楽屋入りする筈もないのであったが、邦枝はそれを承知でいながら、どうしても待たずに入られないのだ。

是芸術院会員且最近得到「無形文化財」榮譽的菊沢寿久翁在權威者之中也是大牌人物、所以在今天的節目当然是被安排在最近尾声、因此不可能在太陽高照時、便来到後台。邦枝了解這點、但是無法不等就進去。

- (8) 今日の会が邦枝には一応日本で最後の舞台になる。出来れば今日弾く琴の音を父の耳に、入れておきたい。そういう希いがあった。

今天的表演会对邦枝可說是在日本最後的一場舞台表演。儘可能地他想将今天彈的琴声彈入父親的耳裡。邦枝有著這樣的願望。

- (9) やがてその部屋に琴屋が琴を運びこんできた。続いで見慣れた三味線鞆が届けられた。もうそんな時間になったかと邦枝は驚き、腕時計の針を確かめると空腹を感じたので部屋を出た。

琴師将琴搬進這間房間來、然後眼熟的三味線套子也跟著被送進來。已經到了這個時間了?! 邦枝嚇一跳、一看手的指針確認時、便感到肚子餓了而走出房間。

- (10) 「おとうさんに会った？」
「会ったわ。でも、話は出来なかったの」
そのことに譲治はそれきり触れなかった。
「見到父親了？」 「見到了。但是沒能說話。」
這件事譲治也只有問到此。

- (11) 追出されても、邦枝は菊沢寿久を離れ得ず狼狽を続けているものと思い込んでいたのであった。その自惚れが無慚に粉碎されていた。

菊沢寿久深信邦枝被趕走後一直很狼狽、還是離不開他。但是、這種自負却無情地被粉碎了。

- (12) 娘の先生は才能があるというがお世辞かもしれない、それを真に受けて道を誤らせたくないこと。

女兒的老師說他有才能、但或許是誇獎的話。我不想因為真正地接受這個而使他誤入歧途。

C

このようにして「地唄」におけるすべての指示詞とその中国語訳文を対照してみると
表 1 >の結果を得ることができる。

<表 1>

日	中	這	這・那	那	計
コ	系	7	0	0	7
ソ	系	17	6	5	28
ア	系	0	0	2	2
計		24	6	7	37

<表 1>により、次のようなことが言える。

- 1、<コ>系は殆ど<這>系に訳される。
- 2、<ア>系は殆ど<那>系に訳される。
- 3、「地唄」における指示詞の中、<ソ>系が 77%を占める。井手至氏（注 4）により、現代の日本語文における指示詞は、<ソ>系が<コ>系より多く用いられる傾向があるとされているが、この作品においても同様である。又、一般に日本語の文章・論文では<ア>系の数が限られているが、この場合も同じである。
- 4、原文に<ソ>系が 28 例あるが、<那>系に訳される 5 例しかないのに対し（いずでも訳せるものを入れると、11 例。以下同様。）、<這>系に訳されるものはそれより多く、17 例（または 23 例）ある。極めて不思議だと思われる。中国語について言えば、この数字は、中国現代文における指示詞は少なくとも 2 倍の比率で<這>系が<那>系より多く多用されるという望月八十吉氏の指摘を裏づける（注 5）。

以上の「地唄」の例はすべて筆者の翻訳であるから、個人的・主観的の恐れがあるかも知れない。また用例も充分でないと思われるので、さらに他の翻訳者の手になるいくつかの作品を選んでその用例を見てみる。

とりあげたのは、芥川竜之介の「羅生門」・「六の宮の姫君」・「秋」・「おお富の貞操」の四篇である（『昭和文学全集 芥川竜之介集』角川書店一九五三による）。中国語翻訳は黄恒正氏訳『復讐的故事』・『仮面具』（長橋出版社刊）による。これらの作品の指示詞についてすべての用例を整理してみると、次のようである。 <表 2> より、これらの作品においても先に述べるた 1～4 の傾向を見てとることができる。

<表 2>

		A	B	C	D
コ 系	這 系	30	10	22	21
	那 系	0	0	0	0
	0	5	5	8	9
	その他	11	4	1	1
	計	46	19	31	31
ソ 系	這 系	9	11	23	18
	那 系	13	9	18	18
	0	16	15	22	20
	その他	6	3	12	13
	計	44	38	75	69

注：A 羅生門(90)、B 六の宮の姫君(57)、C 秋(106)、
お富の貞操(100)。()の中は両系の総数。

四、＜這・那＞の日本語訳の実態とその分析

次に、これまでとは逆に、中国語の指示詞がどのように日本語に訳されるかを見てみよう。その手がかりとして、ここでは、台湾の作家曾心儀氏の小説「彩鳳の心願」中のすべての指示詞を取り出して、その日本語訳文と対照してみたい。「彩鳳の心願」の原作は台湾の遠景出版社刊(1978)。日本語訳は林正子氏・中村ふじゑ訳「彩鳳の夢」『台湾現代小説選 I』(研文出版・1984)によるものである。「彩鳳の心願」中の＜這＞系・＜那＞系が日本語にどのように訳されているかを示すと、＜表 3＞と＜表 4＞のようである。

<表 4>

日 中	コ 系	ソ 系	ア 系	0	そ 他	語 数 (%)
這 系	55	8	2	33	5	103
						79.2
那 系	0	4	7	14	2	27
						20.8
計	55	12	9	47	7	130
						100

<表 3>

日 中	コ					ソ					ア	0
	これ	これ	この	ここ	こんなに	それ	そう	その	そこ	そんなに	ああの んな	
這(主語)	5					1						3
這(述語)						1						
這+名詞			12					2		1		6
這+数量詞			3	1							1	6
這 個			4							1		2
這 些			2					1			1	3
這 様		2			3					1		7
這 麼					2							2
這 種		1			2							2
這 裡		1		11								2
計	5	4	21	12	13	2		3		3	2	33
那+名詞							1				1	6
那+数量詞								1			1	1
那 些											1	4
那 様								1				1
那 麼										1	2	1
那 裡												1
計							1	2		1	7	14

上の二表によると、次の傾向が見られる。

1. 原文では<那>系よりも<這>系の方が遥かに多く、1 対 4 の比率である。これも三節の 4 に述べたように中国語の文章に<這>系が多用される点と合致する。
2. <表 4>の各枠内の割合を見ると、<這>系は半数以上が<コ>系に訳され、三分の一が日本語に訳されていない。<ソ>系・<ア>系またはその他に訳されるのがわず

か数例である。＜那＞系は半数以上が訳されておらず、＜ソ＞系よりも＜ア＞系に訳されたものの方がやや多い。

3. 中国語の＜這＞系・＜那＞系いずれも 30%以上が日本語指示詞に訳されず、特に＜那＞系は訳されない例が半数以上もある。
4. 場所の指示詞は用例が少ないが、少なくとも＜這＞系は規則通り殆ど＜コ＞系に訳されている。

3 についてさらに詳しく見ると、＜這＞系・＜那＞系は日本語に日本語に訳していないものがそれぞれ 33 例と 14 例ある。その中、＜這＞系では「這麼」の 3 例及び「這樣」の 7 例（計 10 例）、＜那＞系では「那麼」の 2 例及び「那些」の 4 例が殆ど「一みたいな」・「一ような」のように訳されている。例えば次の通り。

A 像我這樣姿色平平又什麼美。 (わたしみたいなのを、ちつともきれいだと思わないわよ。)

A' 像我姿色平平有什麼美。

B 像章副總這樣的人、,,,,,, (章副支配人みたいな人、,,,,)

B' 像章副總的人、,,,,,,

C 買了唱片、懷抱在胸前、那樣 (買ったレコードは大事そうに胸
珍惜它 に抱きしめられている。)

C' 買了唱片、懷抱在胸前、珍惜
它

(注：A'・B'・C' は不自然なもの)。

これらの例文で＜這～＞或いは＜那～＞が省略されると、言語直観にそぐわない不自然なものに感じられる。この点は、明らかに、中国語の指示詞と日本語の指示詞の異なるところである。

また、中国語の指示詞の中、次のような普通は日本語に訳さないものがあるのも、中国語指示詞の特徴的な面である。例えば、

A 張華這個人。 張華という人。

B 他們這些年青人。 彼ら若人。

C 昨天来的那個人。 昨日来た人。

中国語の指示詞は、指示の働きのほかに二つの名詞をつなぐ作用が潜在的にある。それに対し、日本語の指示詞はそのような働きが見られないようである。両者のこの違いはもはや構文上の問題と思われる。

五、先行叙述内容の指示

以上、＜こ・そ・ア＞の中国語訳と＜這・那＞の日本語訳の実態について述べてきた。この節では、問題をさらにしぼって＜這＞系と＜ソ＞系との関係に重点を置いて反省・考察し、諸家の説等も合わせて考えたいと思う。

例えば、三節の（C）の例文では、先行叙述内容と対応において＜ソ＞系が多く見られる。作者が登場人物の行動・ありさまについて冷静・客観的物語っていると言うことができる。

（C）の例（9）「その部屋-----運び込んできた」の場合、作者は平静に主人公のいる部屋（作者のいる部屋でない）を話題したので「その」を用いるが、中国語訳文では＜作者今まで述べてきた部屋＞と言う指し示し方をする。今現在話題にしている部屋を指すのである。また、「運び込んできた」という動詞もある。「来・くる」という動詞は求心的な動作を表すが、（9）の例のように、日本語では＜ソ＞系とともに使うことができる。

一方中国語では、求心的な動作には＜這＞系しか使えない。中国語では「搬進那房間来」は非文法的である。つまり、中国語では「来這兒」はあくまでも求心的であり、「去那兒」は非求心的であって、指示詞と動詞の示す方向性とは一致しなければならない。それゆえ、筆者は（9）の例文を「這間房間」と訳した。また、同じ例文中の「もうそんな時間になったか」では、作者は冷静に流れきった“時間”をとりあげる。しかし、中国語訳文では「已經到了這個時間 馬？！」と＜這＞を使って訳になっている。

琴が運び込まれてくる瞬間と邦枝が我に帰る瞬間とは一続きの、殆ど同時と言ってよいくらいの出来事である。邦枝は届けられた琴・三味線などを見た瞬間、「ああ！もう（樂器が届けられるような）現在のこの時間になったか」と思うのである。従って、＜這＞としか訳されない。（C）のような例は多い。日本語ではすでに述べたことを指す場合、それらのもの・あるいはことについて、冷静・客観的に物語るというニュアンスをもつ。それに対し、中国語の場合は先に話題にした事柄は一連の話線の一部にしかすぎず、当然、話の流れとして過去よりも現在の、目の前に見えることを中心にして表わす。日本語のよ

うに、前文の内容を受けて話を続けるということはない。このような場合、中国語ではなく＜這＞系を使うのが普通である。

中国語原文からの日本語訳の場合を見てみよう。「彩鳳的心願」の中の例「這兒不道德、但是多少人往這兒、多少人從這兒爬上往高處的階梯、這些人不都是過得好好的、過得舒服服。」（ここは不道德なところなのかしら。だけど、どれだけの人がここへ駆込み、ここからさらに高いところへ上る階段を駆け上がっていったことだろう。その人たちは、みんながみんな楽な、よい暮らしをしているわけでないにしても）においては、たった今物語ったばかりの人たちを指示するので、中国語では「這些人」となる。しかし、日本語訳文では、一種の回想的な気持ちで述べられた部分であり、語る内容と作者との間には距離感があって、「その人たち」と訳されている。

次のような対話の用例の場合は、「還好我没有生得好姿色、不然可能没有這麼清靜的日子過。」（私器量よしに生まれてこなくてよかった。でなけりゃ、こんな静かな生活は出来なかったもの）と言った雅容のことにばに対し、彩鳳は「雅容、你怎麼這樣說呢？……」（どうして、そんなことというの。……）と対応する。これも日本語では、彩鳳が相手（雅容である）の発言内容を相手の勢力圏内にあるものとして把握するので「そんなこというの」と訳されたと解釈できる。中国語原文では、彩鳳が雅容の言った内容を強調して「這樣」を使っていると思われる。

強調の働きについて、さらに例をあげると、

「我哥哥做生意、常和客戶到夜總會應酬。他說：歐陽 XX 剛出來唱時、……好像不太正常。正在這時候、給日本人 掘、帶到日本去訓練、……」（私のお兄さんは商売をしているから、いつもおとくいさんを連れてナイトクラブへ行くのよ。その兄さんに言わせると、歐陽 XX は歌い始めは中央酒店の専属でばかみたいになかつこうで人形が着るようなヒラヒラのスカートをはいて、それからだらしなくなって、とてもまともでなかったそうよ。ちょうどそのとき日本人にスカウトされ、日本で訓練されて……）

の場合、作中人物である話者は、過去の出来事を話題にしているのだが、＜這＞を使って出来事の生じたときを限定・強調する。「正在」は「ちょうど……している」という意味であり、強調のニュアンスをもつ。「正在」をつけて強調しようとする、「那」では強調の働きが弱く、むしろ不自然にさえ感じられる。やはり、「這」を付けることによって強調の範囲を限定し、それによって強調の働きを強めるのである。このような場合、日本語では「そのとき」と訳するのが自然であり、話者と過去の出来事との間には一定の距離があ

る。以上のような日本語文に見られる<ソ>系について、井手至氏は、

論文・小説或いは会話等の文章において、既に表現された先行の叙述内容
或いは相手の発言内容は、聞き手の諒解したものとして、聞き手にある話材が
意識され、把握されるために、<ソ>系で指示される。

と述べておられる（注6）。

日本語の指示詞の用法に関しては、佐久間鼎氏以来、さまざまな議論がなされている。
佐久間氏は、「これ」は話し手の勢力圏内にあるものを指すのに対し、「それ」は話し相手の勢力範囲にあるものを指すと説かれ、眼前の事象をさして「コ系」を用いるのに対し、
話された事件などで、現に相手との間に話題になっている場合には「ソ系」で指すのが普通・自然だろうと述べておられる。（下線は筆者）

一方、堀口和吉氏コソア三つの表現性の違いは、親近・疎遠ということであり、コ系は熱い強烈な自己顕示の指示であるのに対し、ソ系は冷たい平静な自己抑制の指示であると主張される（注7）。（下線は筆者）

日本語の指示詞については他に久野氏（注8）、高橋太郎氏（注9）、岡村和江氏（注10）等のご論稿に詳しいので、参照されたいが、最後に、筆者の考えに近い説として、正保勇氏の説を紹介する。正保氏は<ソ>系に対して次のような結論を提出された（注11）。

「ソ」は「ア」によっても、「コ」によっても指示し得ないものの指示を行うばかりでなく、「ア」か「コ」で指示しうる条件が揃えられていても、客観的で冷静な指示を装う時には、この指示の方も引き受けるという具合で、幅広く活動を行う語であるが、……

以上の考察、及び先学の説を合わせ考えると、日本語ではすでに物語った事物を指示するのに<ソ>系を用いる場合、話し手とその話した内容との間には一定の距離があり、冷静・客観的に物語るために<ソ>系を用いると考えられる。それに対し、<コ>系は話し手の勢力範囲内のことを指し示すのがその本質であるので、話し手が<コ>系を用いることによって、感情移入を行うような主観的な色彩がある。日本語の<ソ>系に対しては中国語の<這>系を当てて翻訳する場合が多かったが、中国語の指示詞の場合、それ程冷静・

客観的な表現はできず、むしろ今述べたばかりのことを目の前にあるように示すため、なお一層強調するように＜這＞を用いると考えられる。

六、先行研究

前節でも触れた通り佐久間氏以来、コソア指示詞がそれぞれ近称・中称・遠称を示すという説は多くの学者によって支持されているが、ただ、三上章氏は、それを(1)コレ対ソレ・(2)コレ(ソレを吸収)対アレというように二通りの対立として見るべきことを主張され(注12)、ソレ対コレとアレ対コレとは異時的であり、異質であると述べておられる(注13)。この説は、日本語の指示詞を中国語の＜這・那＞の対立と対照して考える場合、都合がよいと思われる。すなわち、コレ対ソレあるいはコレ対アレの対立はそのまま＜這＞対＜那＞であると考えることができる。

指示詞には状況・用法によって、現場指示と文脈指示の二種がある。現場指示に関しては、正保勇氏が次のような簡明な結論を出しておられ、中国語もほぼ日本語の場合にそって解釈できるように思う(注14)。

[融合型]

コ：それに対する「われわれ」の関心が強いもので、近くにある人/物

ソ：「ア」で指すには近過ぎるもの、若しくは、話し手と聞き手のいずれか一方或いは両者の視野にないもの

ア：それに対する「われわれ」の関心が強いもので、遠くにある人/物

[対立型]

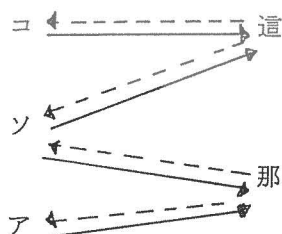
コ：話し手が、自分のなわばりにあると認定した人/物

ソ：話し手が、聞き手のなわばりに属するものと認定した人/物

ア：話し手が、「自分」の領域にも属さないと考えたもの

中国語の現場指示は極めて単純であり、話し手を中心として、しかもそれを唯一の中心として構成される。すなわち、話し手のなわばりあるいは話し手に近いものを指すのが＜這＞系であり、この＜這＞系以外の領域にある物を指す場合はすべて＜那＞系である。従って＜那＞は＜這＞よりも範囲が広い。日中両国語における現場指示詞は、＜コ＞系対＜

ソ>系イコール<這>系対<那>というように、おおむね一致している。従って、翻訳上はあまり問題にならない。問題になるのはもう一方の文脈指示の場合である。文脈指示の場合、両国語を比較して図示すると、次のようである。



(注：実線は日本語から中国語への翻訳。虚線は中国語から日本語への翻訳。)

上の図の中<ソ>系が<那>系と対応するだけでなく、<這>系と対応する場合も多いという現象を生ずる理由としては、次のようなことが考えられる。

一般に、話し手あるいは書き手にとっては、近称とするか中称とするか、それはその場の感情的なものによって直観的に決定されることが多いと言える。日本語の文章では、先行叙述内容について目の前にあるように強調したい、または主観的な感情を移入したい場合には、<コ>系を用いる。それ以外、多くの場合は、平静に物事を語ろうとして<ソ>系を用いる傾向が著しい。一方、中国語の文章では、指示詞によって心理的距離を表現したり客観的に述べたりするよりも、むしろ話し手がその話の内容を現実に見えるように述べ話題にするので<這>系を多く用いる。それに対して、<那>系は実際に一定の距離がある場合または一定の時間（例えば「去年」「前天」）を指す場合に多く用いられると思われる。従って、<コ>系と<這>系または<ソ>系と<那>系とは、全く異なるのではなく、両国語の間には指示詞に対する観念や要求の違いもあると思われる。整理してみれば、次のようである。

「文脈指示」

コ系：現場指示の働きから、基本的には、目の前に生き生きと述べるような場合或いは感情を入れた場合に用いられる（明言・限定）。

ソ系：普通上記以外の場合に用いる。

這系：普通下記以外の場合に用いる。

那系：基本的には、具体的に一定の距離或いは一定の時間を指す場合に用いられる。

中国語は比較的現場主義であり、日本語は現場よりも一歩離れて、平静・客観的に物語るようである。

なお、先述内容の指示に関して次のような調査結果も得ることができた。前述のように、先述内容の指示するとき日本語の場合は多く<ソ>系、中国語の場合は多く<這>系を用いる傾向のあることがここでも裏付けられている。

1. 田中さんはこういった。「……」(○) 田中先生這樣說。「……」(○)
2. 田中さんはそういった。「……」(X) 田中先生那樣說。「……」(X)
3. 「……」田中さんはこういった。(△) 「……」田中先生這樣說。(○)
4. 「……」田中さんはそういった。(○) 「……」田中先生那樣說。(△)

(注：○は言う。Xは言わない。△はあまり言わない。)

七、おわりに

日本語の指示詞<ソ>系と中国語の<這>系に重点を置いて述べてきたが、以上の考察によって文脈指示やその他の表現法における両国語間の違いがある程度明らかになったと思う。このことは日中両国語の翻訳について、やや役立つことがあると言えるだろう。また、先述内容を指す場合、中国語では多く<這>系・日本語では多く<ソ>系を用いる。このことは、総体的に見れば中国語の文章の方が主観的、つまり話し手中心に文章が展開していくのに対し、日本語の文章の方が客観的、つまり話し手と叙述内容の距離をある程度保って話を進める傾向があることを意味すると思う。

一方、現場指示について、全体として中国語の用法と日本語のそれが合致している。が、次の例外もみられる。例えば、中国語では、未知の相手に対して「這位先生、請問貴姓？」「這位先生、請問淡江大学怎麼走？」と<這>系でたずねることが普通である。また、話し手にとって、未知の人が聞き手のそばにいて、この時、日本語では話し手が「その方はどなたですか」とたずねることが可能である。しかし、中国語では「這位先生」のように<這>を使い、<那>を使うことはできない。このような、第三者または聞き手を指す場合に日本語が<ソ>系であるのに対し、中国語が<這>系を用いる傾向について考察を進めていくと、最終的には敬語の問題や話者の心理要素とも絡んできそうである。これらは今後の課題として、なお一層の検討が必要と思う。

注

- 1 新潮文庫 第14刷による。1976
- 2 『現代日本語の表現と語法』 1983 復刊 くろしお出版
- 3 例えば、高砂族言語や蘇州方言客家方言などは、三つまたは四つの区別が見られる。
『現代日本語の表現と語法』・李小凡（1984）「蘇州方言的指示詞」言語学論叢第13
輯などを参照。
- 4 「文脈指示語と文章」 国語国文第21巻第8号 1952
- 5 『中国語と日本語』 1981 光生館
- 6 「代名詞」『続日本文法講座1』 1959 明治書院
- 7 「指示語『コ・ソ・ア』考」『論集 日本文学・日本語 5 現代』 1978 角川書店
- 8 『日本文法研究』 1973 大修館
- 9 「コソアの指示領域について」 国立国語研究所研究報告集3 1982
- 10 「代名詞とは何か」『品詞別日本文法講座 2』 1972 明治書院
- 11 「コソアの体系」『日本語の指示詞』 国立国語研究所 1981
- 12 「コソアド抄」『文法小論集』 1970 くろしお出版
- 13 『現代語法新説』 刀江書院
- 14 注11に同じ。

参考文献

- 井手 至 1952 「文脈指示語と文章」 国語国文第21巻第8号 京都大学文学部
1959 「代名詞」『続日本文法講座1』 明治書院
- 大江三郎 1975 『日英語の比較研究』 南雲堂
- 岡村和江 1972 「代名詞とは何か」『品詞別日本文法講座 2』 明治書院
- 久野 章 1973 『日本文法研究』 大修館書店
1978 『談話の文法』 大修館書店
- 佐久間鼎 1983 復刊 『現代日本語の表現と語法』 くろしお出版
- 堀口和吉 1978 「指示語『コ・ソ・ア』考」『論集 日本文学・日本語 5 現代』
角川書店
- 正保 勇 1981 「コソアの体系」『日本語の指示詞』 国立国語研究所
- 三上 章 1970 「コソアド抄」『文法小論集』 くろしお出版